

「農と人とくらし」

考え深める語らい

「研究センター」1周年で

中央で農村生活問題の調査研究に従事していた研究者、片倉和人さんが郷里の岡谷市川岸上に立ち上げたNP O法人「農と人とくらし研究センター」の設立一周年を祝う記念イベントが二十日午後、三沢区コミュニティ施設で開かれた。岡谷で研究センターが協力する



「農」について増沢さんと笠原さんの話をもとに考えた記念イベント

三沢区民農園の共催行事として計画し、NP O関係者や同区民ら約五十人が参加した。二〇〇一年に農民の目線から地域農業の歴

史についてまとめた「農民の生活―長野県岡谷地方の農業の歴史」を自費出版した増沢さんは、同書をまとめた経過や農業者として自身の体験などを織り交ぜながら講演。安曇野や原村などの農作地帯でも、若い農業後継者の減少が続いている現状を取り上げ、「農」の営みの精神性にまで言及。40%を切

る日本の食料自給率に触れつつ「農が崩れたとき人心は荒廃し、社会が乱れる。農をおろそかにすると国土は荒廃していく」と警鐘を鳴らした。

同士の助け合いなど「いい意味での伝統的な暮らしがなくなりつつある」と解説。戦後の農村生活改善の歴史や「地産地消」を推進する最近の取り組みも挙げながら、「日本ではどうしても農産物の価格が高くなるざるを得ない状況がある。その高い農産物を消費者が承知で買うようなシステムを、これからは

つくっていく必要がある。農政も農家ばかり向いているのではなく、消費者と一体になって農業を守っていく仕組みを構築していくべき」と提案した。

主催者を代表してあいさつした三沢区の山之内寛区長は、五年度の長期的な構えで市内初の区民農園に取り組み、片倉太郎を生んだ製糸発祥の地としてクワの実の栽培を計画していることや、「ヤギを飼育してチーズやバターづくりに挑戦したい」とする構想を披露。片倉代表は郷里に腰を据えて二年近くになる研究センターの活動を振り返り、遊休荒廃農地解消にもつながる区民農園に「全面的に協力していく」と述べた。